

【養蚕】一ロメロ

養蚕とは、蚕を飼育して「繭」をとることです。繭で、絹糸をつくり、絹織物(シルク)をつくります。古代に日本に伝わり、本格的な養蚕は江戸時代に始まったと言われています。独自に発展し、良質で低廉な日本の生糸は明治維新後の外貨獲得手段でした。そのため、当時、日本各地で養蚕の取り組みが行われました。

絹は肌触りがよく、現代でもネクタイ・着物・肌着などで利用されています。

「養蚕」の衰退

「旧山田家養蚕板倉」と呼ばれる遺構の一つが保存展示されています。これは琴似屯田兵の一員である山田貞介さんが自分の敷地内に独自に持った養蚕施設だと言われています。しかし、発見時の昭和五十一年には、物置として使用されていたため、その内部に一目で養蚕施設と分かる手掛かりは残されていません。

屯田兵が入地した明治八年には琴似産の繭はなく、翌九年には、掃立数^{※3}二十二枚、繭四石四斗七升六合(明治三年時の換算で約八百六匁)が生産され、価格にして百三十三円十四銭四厘(現在の価格で約三十三



▲旧山田家養蚕板倉 (北海道開拓の村)

万円)だったと琴似町史にあります。

明治十二年には、琴似と発寒の掃立数は合計で九十三・二五枚、収繭は三十三石九升二合(約五千九百六十匁)、価格にして七百餘円(約百七十万円)となり、札幌管内の養蚕の全収量の三分の一となりました。

しかし、それから琴似での生産量は減少していきます。その理由として、養蚕奨励のため持ち込まれた桑苗は北海道の気候に適さず、寒さのために枯れるものが多く、自然野生の桑の樹が大事に保護されました。屯田兵本部は、何度も保護の布令を出しましたが、非常に手の掛かる桑の樹の手入れと養蚕から次第に離れていったようです。

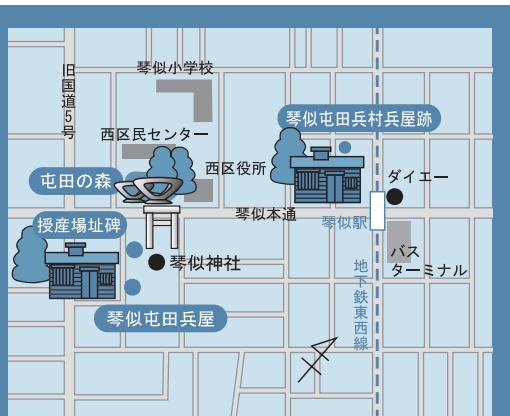
その後も屯田兵本部では、養蚕の奨励をする一方、製糸紡績にも力を入れましたが、すでに大工業化している本州の紡績には太刀打ちできず、徐々に衰退し、明治二十年代に授産の中心産業から姿を消します。

こうして養蚕は幻のようにはかなく歴史の中に消えていきましたが、このほか

にも麻、亜麻、麦類など多くの農作物が屯田兵の産業として取り組まれ、そのさきがけとなった「養蚕」は、その後の屯田兵の産業の礎として貴重な経験となったことでしょう。

昭和五十六年九月に建立された「琴似屯田授産場趾」碑。そのたった一つの石碑についてひもとくだけで、多くの歴史と「琴似」の礎を垣間見ることができます。入地から来年で百三十周年。歴史ある街「西区」には、まだまださまざまな歴史が秘められています。

《参考文献》
琴似町史、琴似屯田百年史、さっぽろ文庫33屯田兵、琴似兵村誌、新札幌市史



▲琴似神社周辺地図

※3 蚕の卵を生み付けた紙の枚数のこと。

後世に伝える
屯田兵の生活



八月二十六日には、今年で十六回目を迎えるふるさと琴似屯田菜園事業「収穫祭」が行われました。

この事業は、国指定史跡になっている「琴似屯田兵村兵屋跡(琴似二条五丁目)」で地域の皆さんの協力により行われています。開拓当時の屯田兵をしのび、ふるさとへの思いを深めてもらおうと、春に一戸に与えられていた大ききの菜園に種をまきました。

今年、ジャガイモ、枝豆、カボチャ、玉ネギを収穫し、兵屋の中で、参加者全員で試食しました。